

家の上の坂

良治光沢芹



中央公論社

検印廃止

©1973

坂の上の家

新装版

著 者 芹沢光治良

昭和48年4月20日初版

昭和48年11月25日3版

発行者 高 梨 茂

印 刷 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二の一

電話(561)5921

振替東京34番

定価 520 円

坂の上の家

「野口さん、野口さん、野口勇三さん、速達ですよ」

大きな声だ。門の外でしている。その声で、勇三は土階で目をさました。

「はい、ポストにいれて行って下さい」

とみ子が縁側から声をかけている。それからすぐ、階段の下から、

「健ちゃん、時間ですよ、健ちゃん」と、とみ子が、次男の健二をおこす声がする。

隣室にねている次男はおきる気配がない。間もなく、階段を上る足音がして、次男の部屋の雨戸をくりあけた。雨戸をあけるのは、次女の役になっているから、智子^{チコ}だろう。勇三の部屋にも明るく陽がさしこんだ。

——これで、まだ二十五分は寝ていられる。

そう思いながら、勇三ははらんばいになって、煙草に火をつけた。

めざましの煙草のうまいこと！ 灰皿の横に、朝刊新聞がきちんとおいてある。長い習慣で、妻のとみ子は起きぬけに朝刊をひろって、そっと勇三の枕もとにしのばせ、いつでも勇三が読めるようにしてあるのだ。早く起きて下へおりられたら、掃除ができていなくて困るから、そ

うしたのかもしれないが、勇三に朝寝をするくせをつけることもなった。

勇三は寢床のなかで朝刊を読むのだ。早く速達をひろって、もって来てくれればいいが、郵便受まで、誰も行こうとしない。妻も子供等も毎朝の習慣をちよつとでもくずせないのだろうか。そういう勇三自身、

「おい、速達をとって来い」とも、声をかけないで、めあたらしい事件もない朝刊に目を走らせている。

「おれも来月の誕生日には定年になるが、そしたら、もう少し早く起きようかなあ」

ふと勇三はそう思ったが、そのとたん、新聞の経済欄から目がはなれた。三十年近く毎朝経済欄に先ず目をとおしていたことが、ばからしいような氣もした。

「定年か。ずっと先のことのように思っていたが、来月は満五十五歳だ」

勇三はもう一度煙草に火をつけて、そう思った。

これで、おれの生涯がおわるということか。こんなに若いのに、生涯がおわったとされては、たまらない。それとも、今までは食うために、みんなを養うために、あくせく働いていたが、もうこれでいいから、自分のために生きる生活をはじめろというのか……どっちみち中途半端で、困った定年だ。勇三は煙草の煙をわにして天井に吹きかけていた。

「おれも早く起きて、朝ぐらいみんなといっしょに食事した方がいいなあ」

勇三はお膳の前に坐りながら、ふとそう言ったが、同じことを幾度も言ったことがあるのを思い出した。言うだけで実行できなかったら、おかしいことだ。

「子供たちも大きくなって、めいめい朝が早いから、いいんですよ。それより夜なるべく早く帰って下さい」

とみ子も膳の前に坐って、エプロンを外した。向きあっても、もう特別に話すこともない夫婦だ。とくに、朝出勤前に世帯の話をきくのがきらいな勇三だ。とみ子は勇三の気心をのみこんでいるばかりでなく、食事の時間をはかってあるかも知れない。

「洋一から速達でした……今日社用で東京へ着くが、まっすぐに本社へ行つて、本社から電話をかけますって——」

「ほう、出張かな」

いつもなら、それで話がおわるのだが、

「あの子の出張が、来月の今頃ならばよかったのですけれど……あたし、来月あなたのお誕生日には、一日ぐらい休暇をとって帰って来るように言つてやろうと思つてました」

「親父の誕生日のお祝いに、会社を休んで大阪から来る奴があるものか」

「誕生日のお祝いではありません。その日で定年でしょう？……いいえ、定年までお丈夫で働いていただいたお祝いやお礼のつもり……それに、定年になったことで、将来のことも相談しなかったものですから」

「おれが定年になっても、洋一には関係ないからなあ」

これ以上定年の話をすれば、勇三が気分をわるくするにきまっている。とみ子は思い出したようにラジオのスイッチをいれた。クラシック音楽が聞えた。勇三もとみ子も音楽が好きだ。

勇三は食事がすむと、妻の力をかりないで、洋服に着換えて、銀行に出勤する。女中のない家庭では、自然に旦那様も奥様もないことになる。しかし、その日はとみ子が、めずらしく玄関に送って出て、

「これ、洋一が来る前に読んでおいて下さい」と、ぶあつな手紙を勇三にわたした。

「洋一から十日ばかり前に来たんですが、お話ししなかったものですか——」

勇三は不審に思つて、家を出た。いつてらっしゃいと、とみ子の声はずんでいたから安心した——

勇三が家の前の坂を下って、中央線の駅に出るのに、八分かかる。国鉄の四ッ谷駅まで、十分足らずだが、通勤時間の急行電車のこむことといったら、立ちずめで、息もできない。

「この混雑も、もう一月のがまんだ」

勇三はそう自分にいってみた。四ッ谷駅で、イグナチオ教会よりの出口に出て、待っていれば、九時十分前後に、常務の車が通りかかって、ひろってくれる。常務の車が都合が悪ければ、青山南町に住む貸付部長の車が代って廻りみちをしてくれる。

その朝は、二分も待たないで常務のプリンスに乗った。

「野口君、今度の日曜日はあいてるか、立山商会の招待で、川奈へ行くことにしているんだがね。土曜日の午後から行って、ゆっくりゴルフをたのしむつもりだが、どうだね」

「残念ですが……常務」

「遠慮しなくていいよ。うちの銀行から三名行くんだから……ずいぶん野口君の腕前を見ないなあ——」

「常務は近頃あたっているそうですね。ハンディもあがったそうで——」

「僕かい、忙しくてだめだ。腕はあがらん。今度の日曜日には貸付部長もいっしょだよ」

「私は残念ですが、近頃ゴルフをやめておりますので——」

「どうした、野口君、血圧でも高いのか」

知っているのにと、勇三は思った。定年を目の前にして、ゴルフどころではない。つとめに附属した習慣を、今のうちにだんだんすてようと思ひ、ゴルフから手はじめにと、今年になってからゴルフ場へ行ったこともない。銀行におるからこそ、銀行の仕事の一部であるように考へるからこそ、ゴルフもできたが、銀行をやめたあとで、第一、新しくクラブに入会することさえできない身分だ。渡井常務のように、定年の心配のない重役は、定年前の心境などわかるまいと、勇三は黙っていた。

「近頃、顔色がよくないと思ったが、いかな。君のような若さで、ゴルフもやれないなんて……これからはいいか」

「ですから、ゴルフもやめました——」

「氣をつけるんだな」

白々しい言葉だと、勇三は胸にうけとめた。

常務は六十を越えている筈だ。顔色はひにやけて、古い陶器の肌のようにつややかだ。銀行

は株式会社ではあるが、渡井一族の同族会社も同然だ。勇三は三十年近く働いたのも、渡井一族のためだったろうかと、定年前になってから考える始末だ。常務が毎朝車を四ツ谷駅にまわすのも、温情主義だといわれるが、節約主義にすぎない。このプリンスにも、これから三十回乗らないですむだろう、そう思うと、却って勇三は清々しかった。

車は日本橋の本店前でとまった。車をおりれば、渡井は堂々たる常務だし、勇三は肩をいからしても、定年直前の行員だ。

4

勇三は銀行へ着いたら、その瞬間、家庭のことも、その他私用は一切、存在しないことにしている。妻のとみ子にも、銀行へ電話をかけることを禁じているほどだ。

机の上には、小さな書類箱がある。そのなかの書類に目をおすことから、毎朝、勇三の仕事ははじまる。それから、銀行業務という歯車にまきこまれて、野口勇三という人間の一日ではなくなってしまうのだ。

しかし、その日は折匏を机の横においたとたん、長男の洋一の手紙を思い出した。銀行の書類よりも、その手紙を読もうとしたのも、定年前の心のゆるみだろうか、それとも、常務の白

白しい言葉の影響だったらうか。

「お母さん、

これはお父さんには内証にして、お母さんの胸におさめて、お父さんの心を動かすように努力して下さい。僕はお母さんを信じているから、書きます。

僕がいつか結婚することは、お母さんも考えていたでしょうが、家庭をはなれて、独身寮にいては、知らない間に人間的にスポイルされますから、僕もここでそろそろ結婚しようと考えはじめました。こんな風に打ちあけると、お母さんはあわてて候補者を探すかもしれませんが、その心配はしないで下さい。僕も現代の青年が誰でもするように、自分の相手は自分で選びます。

遠廻しな言い方はやめます。選びますではなくて、すでに選んだといった方がいいかも知れません。お母さんは僕の選んだ女性を、お母さんが選んだものとして、受け入れて下さると信じています。お母さんはいつも僕の幸福しか考えないような、すばらしいお母さんですから、その点、僕は安心しています。ただ心配なのは、お父さんです。

お父さんは物わかりがいいような顔をしたがりますが、あれでなかなか、封建的なあ、かがついています。長男の嫁で、お前の妻ではない——と、口ではまさか言わないでしょうが、はら

ではそう考えていて、きっと、いろいろ文句が出ると思います。その点、僕が具体的に申し出るまでに、お母さんからお父さんを、けんせいしておいて欲しいのです。

僕だって、自分の結婚ですから、考えつめたことで、相手の女性についても、理想をいえばきりがありません。おたがいに気があつて、これから協力して行ける見透しがついたら、こころで決心すべきだと思います。お母さん、僕が気に入った女性なら、いいでしょう。どうか、お父さんを説得して下さい。おたのみします。説得できたら、僕、具体的に申し上げます。ご返事を待っています。洋一」

読みおわって、勇三は大きく呼吸した。洋一がこんな女の子のような文章を書くとは知らなかった。

「ばかな奴だ。手ごわいのはお母さんだぞ」そう勇三は洋一に言いたかった。しかし、それを承知で、わざとこんな手紙を書いたのなら、なかなか抜目のない奴だと、勇三は微笑して、「おい、給仕、お茶」と、思わず大きな声で言ってしまった。

その日の昼をすませた時、勇三は面会人を応接間におしてあるからと、給仕から耳打ちさ

れた。昼食は、部長クラスは二階の会議室に集まって、銀行から支給される弁当を食べながら、会議をすることになっている。常務や他の重役もいっしょのことが多い。昼食時間もむだにしないという銀行の方針だろう。

「なに、面会人だって？」

そう勇三はわざと給仕に言いながら、立ちあがった。食事会議というような、くだらない雑談から解放してくれるなら、どんな面会人だって、ありがたい。勇三は一階の応接間へおりて行った。応接間の椅子に、長男の洋一が煙草をくわえて、かけていた。

「なんだ、お前だったか、いつ来たんだ」

「お父さん、お忙しいんですか」

「お前、お昼はすんだのかい」

「すみません。それで至急にお父さんに会わなければならない用があったんですが、話をきいていただけますか。お父さんは銀行では、一切私用をきかないってこと、知ってるんで——」

「来てしまったら、しかたがないや。聞こう」

「京浜地区の工場の視察だということで、今朝早く着いたんです。同期のものが、大阪支社から十四人……。午前中は本社で、注意があつて、午後から工場見学ですが……さつき人事課長か

ら呼ばれて、本社へ転勤する意思はないかって、きかれたんです。希望すれば、三日の視察がおわったら、みんなといっしょに大阪に帰って、すぐ東京に転勤しろというのですが……僕が辞退すれば、他の者に話すらしいです。速答とめられたが、僕は一時間ばかりゆうよをもらって、車をとばして来たんです」

「お前は東京へ来たいんだらう。おれに相談するまでもなく——」

「それが、迷ってるんです。あんまり突然ですから」

「迷うことはないよ。お前が好きないようにすればいい」

「やだなあ、折角お父さんの意見をききに來たのに……僕の将来を考えて、もう暫らく大阪の現場にいた方がいいか、それとも本社に転じた方がいいか」

「それは、おれにもわからんよ。しかし、人事課長がお前を第一候補にしたのには、意味があるかも知れんからな」

「やっぱりそうでしょうか。お父さんが東京へ転勤しろというお考えならば、そうします」

洋一は腕時計をのぞきながら立ち上っていた。

「おい、おれに恩をきせようとしても駄目だぞ」

勇三も笑いながら立ち上った。洋一が母親にあてた手紙を、その朝勇三は読んでいたので、